

鈴鹿市立箕田小学校		NO. 1		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題 ○:成果 ▼:課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	1 授業改善・授業研究 - 主体的な学びを生む指導 - ICTを活用した授業づくり →「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を使う」週3回以上:70%以上 - 年2回の研究授業 - 全教員の研究授業の実施 →児童アンケートによる検証 「学校の授業がわかる」よくわかる:60%以上 →保護者アンケートによる検証 「学校は工夫した授業に努めている」よく努めている:50%以上 2 基礎学力の向上 - 家庭学習の充実(家庭学習のてびきの作成、チャレンジ学習のたよりの発行) →家庭学習時間の増加 平日1時間以上:60%以上 →児童アンケート「宿題をする」取り組まない:0% →保護者アンケート「子どもの学習の様子を見る」肯定的回答:80%以上 - 読書活動の充実 →図書貸出冊数児童1人年間:45冊以上	1 授業改善・授業研究 ○対話を通して、学びを深め合う授業スタイルを工夫、改善したことにより、児童の学習意欲の向上につながっている。 ○年2回の研究授業だけでなく、学期に1回程度、教員が自分の授業を積極的に提案し、教員同士授業を見合って学び合い、研究することができた。 ○「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を使う」【市のアンケート結果より】 1・2・3年生週3回以上(R6: 8% → R7: 87%) 4・5・6年生週3回以上(R6: 75% → R7: 88%) ▼児童アンケート結果 「学校の授業がわかる」(よくわかる: R6 55.2% → R7 53.4%) ▼保護者アンケート結果「学校は工夫した授業に努めている」 (よく努めている: R6 32.7% → R7 36.4%) 数値は3.7%上昇したが、目標値(50%)には届かなかった。 2 基礎学力の向上 ○「チャレンジ学習のたより」を発行したことにより、学ぶ内容や方法が明確に伝わり、児童の意欲向上につながった。 ○基礎学力定着のため、朝の学活の時間を利用して、5分間学習に取り組んだ。 ▼1日の平均家庭学習時間が減少した。【学調児童質問紙(6年)より】 (平日1日1時間: R6 48.6% → R7 38.7%) ▼児童アンケート結果 「宿題をする」(取り組まなかった: R6 3.5% → R7 1.6%) 数値は上昇したが、目標値(0%)には届かなかった。 ▼保護者アンケート結果「子どもの学習の様子を見る」(肯定的回答:R6 71.5% → R7 72.0%) 数値はわずかに上昇したが、目標値(80%)には届かなかった。 ▼図書貸出冊数が減少した。児童1人年間:45冊以上(R6 年間48冊 → R7 31.1冊<R6 39.3冊)※12月末)	1 授業改善・授業研究 ・授業スタイルの工夫は進んでいるので、子どもたちが「わかる楽しさ」を味わえることを主眼とした授業を目指し、より質の高い授業づくりを研究していく。 ・子どもたちがわからないときに安心して「わからない」と言える学びの場をつくる。ペアでの対話やグループ学習などで、わからないことを共有しながら、互いの学びが深まるよう協働的な学習を推進する。 ・誰もが安心して自分の思いが表現できる居心地のよい学級づくりをおこなう。 ・「学びたいわ」で子どもたちが自分の考えを言語化し、「わかった」が実感できるように、教師が価値づけていく。 ・授業参観でも現在研究を進めている授業スタイルを公開し、保護者に啓発していく。 ・来年度も自主的に教職員同士で授業を参観し、学ぶ機会を設ける。 <来年度の指標> ⇒児童アンケートによる検証 「学校の授業がわかる」よくわかる:60%以上 ⇒保護者アンケートによる検証 「学校は工夫した授業に努めている」よく努めている:50%以上 2 基礎学力の向上 ・宿題については、児童の背景にある生活習慣や家庭状況の把握に努めるとともに、個に応じて指導助言を行い、少しでもできたことを認めながら、児童の意欲向上を図る。さらに学校でも、放課後や休み時間に個に応じた支援を行い、習慣化につながるよう引き続き指導していく。 ・登校の状況によってはリモート授業などを活用し、学校とのつながりを継続的に維持し、途切れのない教育活動をおこなっていく。 <来年度の指標> ⇒児童アンケート「困った時には相談する」 相談できる肯定的回答:85%以上	・先生方の日頃の様々な取組に頭が下がる思い。アンケートの結果は、とらえ方や感じ方による。数字だけで判断するは難しい。基礎学力でつまずくと学校生活が楽しく送れないので、先生方の熱心な指導を願う。 ・教員同士が自身の授業を積極的に提案し、学び合いを展開するのは重要な取組である。その成果は、保護者アンケート「学校は工夫した授業に努めている」の数値アップに結びついている。教員に求められる力のうち、授業力(集団を見る力、個を見る力)は大きなウエートを占める。今後も取組の継続をお願いしたい。 ・保護者アンケート結果は、3.7%上昇しているので、次年度の結果を注視して見ていければ良い。(継続) ・ICT活用授業を参観して、授業の進化を実感した。先生方のスキル向上や授業準備へのご苦労に頭が下がる。 ・先進国では急速なデジタル化が現場の混乱を招き、子どもの身体疲労の影響も指摘されている。デジタルと紙をバランスよく併用しながら、より良い授業を目指していただきたい。 ・スマホ、タブレット等でも読書できるので、図書の貸出冊数はこれからも減少すると思う。 ・読書活動では、貸出の実績がやや減少気味だが、全国図書館協議会の統計では、「小学生の月平均読書は13.8冊、不読率は62.4%と過去最高を更新」とある。予算の問題もあるだろうが、子どもが読みたい本の蔵書を増やし、幼少期からの読書習慣によって、「読書離れ」に歯止めをかけてください。
長期欠席対策	1 早期支援のための「対応」「仕組み」の確立 ・身体、行動に表れている登校渋りのサインのキャッチ ・迅速な情報共有(担当者や管理職への報告・連絡・相談) ・ケース会議等の実施 ・スクールカウンセラーの積極的活用や外部機関との連携 →30日以上不登校での欠席児童数:2人以下 →児童アンケート「困った時には相談する」相談できる肯定的回答:85%以上(相談することがない回答は含まず) 2 新たな不登校を生まない学校づくり ・子どもたちが学校生活を「楽しい」と感じる授業や取り組みの推進 →児童アンケート「学校が楽しい」とても楽しい:70%以上 →児童アンケート「クラスの仲間を大切にする」肯定的回答:100% →保護者アンケート「子どもが友だちと良い関係を保っている」肯定的回答:90%以上	1 早期支援のための「対応」「仕組み」の確立 ○児童の欠席状況を教職員全体で共有し、見守る体制づくりができています。 ○スクールカウンセラーへの相談を適宜勧めることによって、保護者や児童の心の安定が図られた。 ○30日以上の不登校児童数が減った。(R6 4人 → R7 1人 ※12月末) ○前年度まで不登校傾向であった児童にも改善傾向がみられた。 ○スクールライフサポーターによる支援が効果的であった。 ▼児童アンケート結果 「困った時には相談する」(相談できる肯定的回答: R6 61.2% → R7 69.4%) 数値は上昇したが、目標値には届かなかった。 2 新たな不登校を生まない学校づくり ▼児童アンケート結果 「学校が楽しい」(とても楽しい: R6 71.6% → R7 67.9%) ▼児童アンケート結果 「クラスの仲間を大切にする」(肯定的回答: R6 99.0% → R7 97.9%) ○保護者アンケート結果 「子どもが友だちと良い関係を保っている」(肯定的回答: R6 98.2% → R7 97.9%)	1 早期支援のための「対応」「仕組み」の確立 ・家庭との連絡をより密に取り、校内での欠席情報の共有を徹底する。 ・「困ったときに相談する」の割合の増加を受け、引き続き教職員やSC、SLSとの適切な関係の構築を図っていく。早期対応や安心できる学校生活へつなげていく。 ・登校の状況によってはリモート授業などを活用し、学校とのつながりを継続的に維持し、途切れのない教育活動をおこなっていく。 <来年度の指標> ⇒児童アンケート「困った時には相談する」 相談できる肯定的回答:85%以上 2 新たな不登校を生まない学校づくり ・子どもたちには、目的意識をもって様々な行事等に取り組ませ、達成感や満足感を味わえるような取組とし、仲間と協力したり、活動したりすることで喜びを見出し、安心できる人間関係を構築していく。 <来年度の指標> ⇒児童アンケート「学校が楽しい」とても楽しい:70%以上 ⇒児童アンケート「クラスの仲間を大切にする」肯定的回答:100% ⇒保護者アンケート「子どもが友だちと良い関係を保っている」肯定的回答:90%以上	・子どもたちの心の安定と安心できる学校づくりに向けた取り組みがされていると思う。 ・AIに相談する子も多いと聞く。良い方向に向かえばそれもいいと思う。気軽に先生や友だち、家族に相談できる環境、雰囲気になれいい。社会全体(地域)もそうなるように意識していきたい。 ・長欠や不登校対策は、学校だけでは完結できない課題。保護者理解が必須なので、関係機関やSC、SLSとの協働で、子どもと保護者、二方向からのアプローチで進めていく取組を望む。 ・文科省から「不登校対策に向けたプランの推進」が打ち出される中、この地区でも不登校が現実問題となっている。親身になった努力のおかげで、改善傾向ということで一安心だが、これからの対策につなげ、学び舎としての価値を高めていただきたい。 ・学校が楽しいが、70%なのが気になる。少ないと思った。
非認知能力育成	1 重点4項目(やり抜く力・自制心・自己肯定感・社会性)の育成への取組の推進 ・教科学習、特別活動、学校行事、学年行事等を通して育成 ・授業での振り返りに重点項目を含め、児童自身の育成への意識向上を図る ・全校での自己肯定感を高める取組の実施 ・非認知能力育成に関する教職員研修の実施:年1回以上 →児童アンケート「誰かの役に立つことをする」肯定的回答:100% →保護者アンケート「子どものよいところを認め、ほめている」肯定的回答:90%以上 →市の児童アンケート 重点4項目:市の目標値を達成する 「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」…否定的回答10%未満 「社会性」…否定的回答1.8%未満 2 非認知能力を育成する授業実践、生徒指導体制の確立 ・教育的不利な環境のもとにある子どもを中心とした仲間づくり →授業参観で人権学習を公開し、保護者への啓発を行う →教職員による仲間づくりに関するレポート研修の実施 ・いじめのない楽しい学校づくり →いじめアンケート:年3回実施 ・いじめを認知した場合の迅速な対応と組織的対応	1 重点4項目(やり抜く力・自制心・自己肯定感・社会性)の育成への取組の推進 ○異学年交流(縦割り班活動)を通して、仲間を大切にする意識を高めるとともに、自制心や社会性の育成につなげられた。 ○教育委員会指導主事を招聘した研修会を年4回実施し、教職員の実践力向上を図った。 ▼児童アンケート結果「誰かの役に立つことをする」(肯定的回答: R6 92.5% → R7 91.2%) ○保護者アンケート結果「子どものよいところを認め、ほめている」(肯定的回答: R6 98.8% → R7 97.9%) ○市のアンケート結果「やりぬく力」:(否定的回答: R6 8.5% → R7 7.6%) 「自制心」:(否定的回答: R6 19.8% → R7 7.6%) 「自己肯定感」:(否定的回答: R6 13.2% → R7 15.2%) 「社会性」:(否定的回答: R6 2.8% → R7 1.0%) 4項目のうち、3項目は数値が上がり、目標値に達しているが、「自己肯定感」は、数値が下がり、目標値も下回った。 2 非認知能力を育成する授業実践、生徒指導体制の確立 ○いじめをアンケート等から認知した場合には、迅速に対応等について協議し、組織的な取組に努めることができた。 ○人権教育に関する研究授業や仲間づくりに関するレポート研修を実施し、教職員の実践力向上につなげることができた。 ○ピンクシャツ運動(いじめ防止運動)を実施し、児童、保護者へ啓発することができた。	1 重点4項目(やり抜く力・自制心・自己肯定感・社会性)の育成への取組の推進 ○やりぬく力と自制心の目標項目を引き続き授業の「学びたいわ」に加え、毎時間振り返ることで、意識の向上を図る。 ○自己肯定感においては、まず他者から肯定されることによって、自己を肯定できる土台を整えたい。 ○誰もが自分らしくいられる学校づくりを目指して、子どもの見方、子ども理解を深められるよう、日々教師が感性を磨き、自己研鑽に努める。 <来年度の指標> ⇒市の児童アンケート 重点4項目:市の目標値を達成する 「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」…否定的回答10%未満 「社会性」…否定的回答1.8%未満 2 非認知能力を育成する授業実践、生徒指導体制の確立 ○アンケートの有効活用、事案に対する即時的な対応やその後のケアを学校全体の問題としてとらえ、組織的におこなっていく。 ○ピンクシャツ運動を継続して取り組んできたことにより、全校的な定着が見られる。加えて、運動の意味や意義を感じながら取り組みに参加する児童、保護者が増加している。よって、今後も意義を考えて取り組めるよう、継続して行っていく。	・どの子も自己肯定感が持てるとよい。良いものたくさん持っているのに、自分では気づかなかったり、自信が持てなかったり、謙虚すぎたり…。堂々と前向きに生活できる子が増えることを願う。いじめについては、これからも迅速な対応を続けていただきたい。 ・「自己肯定感」の数値を気にされていますが、前年だけでなく、数か年や年度途中の再調査を行うと違った見え方もあるように感じる。成果の数値より、活動の回数や内容に目を向け、プラス思考の取組を期待したい。 ・学校の規模が小さくなるにつれて、他の学年との交流が増えたり、学年関係なく仲良くできていることは、子どもたちの社会性や自己肯定感が上がることにもつながっていくので良いと思う。 ・いじめの問題の解決支援については、一筋縄ではいかないケースも多く、いじめの事実確認は困難を極めているだろうが、いじめを防止する教師の役割は、家庭、地域社会、学校の架け橋とも言われている。(昔の担任の教えは弱い者、いじめはするなでした。)大変だろうが、子どもたちの目線に立ってしっかりと対応をしてほしい。

地域連携	1 家庭・地域と協働した取組の推進 ・学校運営協議会を活用しながら、学校の課題について保護者・地域の方と協議する。 →学校運営協議会:年6回開催 ・学校支援ボランティア等を活用した学習活動の実施 →市の児童アンケート「地域の行事に参加している」肯定的回答:80%以上 2 中学校区の学校間連携 ・小学校・中学校間での児童生徒の情報共有 ・校長会、各学校の担当者が集う会議の実施 ・中学校の教員による小学校での出前授業の実施 ・小中学校教員の合同研修会や、教員の授業を参観し、授業研究を行う ・児童生徒による人権フォーラムの実施	1 家庭・地域と協働した取組の推進 ○学校運営協議会を年6回行い、子どもたちの学力・体力・健康面等の課題について協議することができた。 ○今年度も地域の方やボランティアの方のご支援・ご協力のもと、2年生生活科の「校区探検」、3年生社会科の「地域学習:虫送り」、4年生体育科での「わくわく体験ニュースポーツ教室」等の学習活動を実施することができた。 ○今年度は創立150周年に際し、昔の箕田小学校について、地域の方とともに調べ学習を行ったり、1年生の昔の遊びや4年生の地域の環境美化にかかわって、地域の方とともに活動したり、地域へ啓発活動を行ったりした。 ○「地域の大人に、授業や放課後など勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがあるか」【学調児童質問紙(6年)より】 肯定的回答:52.3%(全国比+12.9) ▼市のアンケート結果「地域の行事に参加している」肯定的回答:80%以上 1・2・3年生肯定的回答(R6 73% → R7 66%) 4・5・6年生肯定的回答(R6 83% → R7 85%) 様々な地域行事が開催され、児童も喜んで参加している様子がみられるが、低学年の参加率が低い。 ▼見守りボランティアの組織化がまだまだ十分に進んでいない。 2 中学校区の学校間連携 ○生徒指導、人権教育、特別支援教育、不登校対策等、様々な連携会議をもち、小・中学校間での児童生徒の情報共有を行うことができた。 ○他校の研究授業の参観に出向き、自校での実践に生かすことができた。 ▼様々な面で情報共有はできるようになったが、取り組みや目標値を共有するまでには至っていない。	・登下校の見守りボランティアは、高齢化に伴い、年々参加いただく方が減少傾向にあるので、見守りを持続させていくためにも「見守りボランティアの会」を開催しながら、募集方法や組織のあり方について協議をしていく。 ・校区の小・中学校間での情報共有を丁寧に行いながら、小中9年間の学びを系統的に考え、連携して児童生徒の課題解決に当たり、小中一貫教育をさらに推進していきたい。 <来年度の指標> ⇒市の児童アンケート「地域の行事に参加している」 肯定的回答:80%以上	・地域と連携することで、子どもたちの知育を大切に育てる環境づくりができると思う。 ・創立150周年ということで、地域のシニア世代、特に小学生から箕田に在住している方に話を聞くと、懐かしそうにしているのが伝わりました。このような行事をきっかけに学校と地域、大人と子どもたちが自然に交流でき、それが子どもたちの健やか成長につながればと思う。 ・創立150周年という年に、地域の取組や箕田小の歴史に触れる機会を持ったのは、意義がある。少子化の時代だからこそ地域で地域の子を育て、次世代を育てる発想が大切。地域の力を借りながら、地域の学校づくりに取り組んでほしい。 ・他の学校では、地域の行事が減少している中、箕田小は、地域行事を大事にしていると思う。 ・子どもに無関心な保護者もないわけではないので、SOSに気づけるように、様子を注意深く見ていく必要がある。 ・小学校では楽しく学校に通えていても、中学になって周りの環境や生活習慣の乱れなどで、不登校になる子がいるのは、とても残念。 ・「見守りボランティア」の高齢化に伴う参加者の減少で、見守りを持続させることが困難とのことだが、今後、住民参加を促すには、「地域づくり協議会」等との連携を強化し、住民からの意見聴取や情報発信をこまめに行っていく必要がある。これからも、「地域に開かれた学校」であるようにお願いしたい。 ・今年度は、小中・地域合同による地震・津波訓練を実施していないようだが、災害時における学校の役割は大きく、防災対策は教育活動と不可分であると言われている。今後もこの種の訓練を通じた防災教育と、それによる住民との連携の強化をお願いしたい。 ・中学校との連携は、前に進んでいると思う。
学校における働き方改革	1 総勤務時間の縮減に向けた取り組みの推進 ・定時退校日の設定:月2日 ・時間外労働の削減:月45時間以上0人 ・会議の効率的な進行 →60分以内に終了:70%以上 2 仕事の効率化 ・ワークシートや会議資料等のデータ化・共有化 ・会議・行事等の精選、業務内容の分担の適正化 ・児童の下校時刻を早めるB日課を設定し、放課後の業務時間の創出	1 総勤務時間の縮減に向けた取り組みの推進 ○定時退校日については、月2回設定し、定時退校できた人数の割合(実施率)については80%以上を保っている。 (実施率: R6 88.8% → R7 80.4%) ○時間外労働については、月45時間以上0人を達成することができている。 ○総勤務時間についても削減することができた。 (R6 21.4時間 → R7 19.4時間 ※12月末) ○会議を効率的に進めることができた。 (60分以内に終了: R6 64.8% → R7 78.0% ※12月末) 2 仕事の効率化 ○職員会議等について提案資料の電子化が定着した。 ○スクール・サポート・スタッフを活用し、教職員の印刷等の業務が削減されている。 ○B日課を月1回から2回に設定したことにより、放課後に会議や研修、教材研究のための時間をより確保することができた。 ▼クラス数減少に伴い、教職員の配置も減少しているため、一人当たりの担当業務が増えており、負担感が大きい。	・総勤務時間の削減は、改善方向へやや進んでいるが、まだまだ時間外労働時間は長いと、引き続き、業務の削減、効率化に向けて、工夫を重ねていきたい。一方、学校現場においては、どうしても繁忙期があるので、メリハリをつけて、やりがいを見出しながら業務に励んでいきたい。 ・今年度はB日課を月2回設定したことにより、児童の個別対応への時間が作り出せたこと、また教職員の会議や教材研究の時間が確保されことなど、メリットが大きかったので、継続していく。 R8年度から、鈴鹿市全体で ・1学期始業式を4月8日とする ・学期始まりと学期終わりの3日間を午前日課とする(4日間も可能) ・5限授業または4限授業を定期的に設定する という方針が打ち出されたので、それに則り、さらに業務の効率化、時間外労働の縮減に努めていく。	・勤務時間が気になりつつも、膨大な業務の対応に日々努力されていることと思う。子どもたちのためにお体を大事にして、活力のある「元気 いっぱいの先生」でいてください。 ・先生が、心身ともに元気で「こんなことをしたい。こんなことをさせたい。」と思える学校づくりが、子どもの幸せにつながる。無理をせず、毎日元気に出勤してください。リフレッシュを忘れずに。 ・教員不足の深刻化が喫緊の課題となる中、先生方は多岐にわたる業務をこなし、総勤務時間の縮減や仕事の効率化に向けた取組にも成果を上げている。 ・様々なチャレンジがあるだろうが、若手もベテランも「現場の声」を大事にしてワンチームで奮闘すれば、必ずや日々の疲弊した多忙感を「やりがい」や「充足感」に変えることができるかと思う。